

老人看護学教育の検討 (その2)

—看護実習とその背景の老人像に及ぼす影響について—

片山信子・出宮一徳

1. はじめに

老人看護の質は看護婦のもつ老年観に深くかかわっている¹⁾と言われ、第1報²⁾では老人に対する看護学生のイメージを講義とのかかわりから検討した。その結果、講義のみでは、学生の老人への関心は喚起されても、老人イメージには有意な変化は見出されなかった。

引き続き本稿では、老人と話す機会の多い者は、肯定的イメージをもつ³⁾と言われていることを確認するために、特別養護老人ホームにおける実習(45時間)と、病院における成人看護実習の前半終了時に学生のもつ老人イメージについての追跡調査を行ない、「主に老人とのかかわりとイメージの変化」について分析した。あわせて、現在老人専門の病院に勤務している看護職と看護教員養成コースに学ぶ看護職の老人イメージについても調査し検討を加えた。

結果として、①老人と真剣にかかわった体験や老人の自立・自主能力を最大限生かすような看護体験は、老人のイメージを著しく肯定的にしたこと。②実習や立場によっても変化を見ないイメージのあること。③看護学生と看護職のもつイメージの違いなど、が明らかにされた。全体的に、老人イメージを強く肯定的にしたものに、特別養護老人ホーム実習があり、最も否定的にイメージされていたのが、老人専門病院における看護職である。こうした点から、老人看護の質と内容が老人像に大きく影響を与えていることが顕著に見出された。

2. 研究方法

1) 調査対象と方法

(1) 本学看護科学生(延346名)について

①. 第1回目調査:老人看護概論(15時間)講義開始直前に99名(1989・1990年10月,1年次生),②. 第2回目調査:同講義終了時99名(1989・1990年12月,1年次生),③. 第3回目調査:特別養護老人ホーム実習(45時間)終了時99名(1990・1991年3月,1年次生),④. 第4回目調査:成人看護学臨床実習中間49名(1991年7月,3年次生)に調査票による自記留置法を用いて調査

した。有効回答数は312枚(90.2%)である。

(2) 老人専門病院に勤務している看護職(以下看護婦とよぶ)55名に対して、1990年8月、調査票に基づき自記留置法で調査した。有効回答数50枚(90.9%)である。

(3) 岡山県看護教員養成コースに学ぶ看護職(以下看護教員とよぶ)29名にも同様の調査を行った。(1990年10月)。有効回答数は29枚(100%)である。

調査項目は、第1報同様SD法により、老人のイメージを23個のコンセプトで7段階の設定スコアで点数化したものを用いた。

2) 分析方法

データの数量化と基本統計は、第1報に準じて行った。対象間でのイメージの相違の検定はRYAN法を用いた。

3. 結果

1) 老人イメージの平均的プロフィール

肯定的な極の順に7点から1点までを配し、中立点を4点とした。素集計の結果は表1である。学生の学習進度別プロフィールは図1に、看護婦および看護教員、学生の第4回目調査別によるプロフィールを図2に表わした。

(1) 全対象の老人イメージの平均値が5.0以上の高得点であったものは次の項目である。

①「価値ある—無価値な」(全対象の平均値5.4)は最高点に特別養護老人ホーム実習終了時と看護教員(平均値5.7, SD 1.0・1.7)から、最低点の看護婦(平均値4.7, SD 1.6)の間には相当のひらきはあるが、全対象に肯定的イメージがみられた(看護婦には1%の有意差を認めた)。②「温かい—冷たい」(全対象の平均値5.3)は、看護教員(平均値5.9, SD 0.9)を最高に、最低の看護婦には1%の有意差を示すが、すべての対象に肯定的イメージ「温かい」範囲にあった。③「好き—嫌い」(全対象平均値5.1)での肯定的イメージは、特別養護老人ホーム実習後(平均値5.9, SD 1.0)と看護教

表1. 尺度得点の基本統計

対 象 尺 度	看 護 科 学 生				看護婦 n=50	看護教員 n=29
	1年後期(第1回目)	1年後期(第2回目)	1年後期(第3回目)	3年前期(第4回目)		
	講義前 n=97	講義後 n=89	実習(特別養護老人ホーム)後 n=86	実習(病院)中間 n=40	平均値±SD	平均値±SD
1. 静的な-動的な	4.1±1.9	4.0±1.8	3.8±1.6	4.9±1.2	3.1±1.7	3.0±1.7
2. 親しみ-親しみ 易い にくい	4.6±1.5	4.6±1.3	5.7±1.1	5.3±1.1	5.1±1.5	5.4±1.5
3. 明るい-暗い	3.7±1.0	3.7±1.1	4.9±1.2	4.1±1.0	3.0±1.5	4.3±1.0
4. 柔らかい-固い	3.9±1.4	3.8±1.6	4.3±1.7	3.7±1.4	3.2±1.8	3.7±1.7
5. 好き-嫌い	4.9±1.2	4.9±1.2	5.9±1.0	5.0±1.2	4.5±1.6	5.5±1.1
6. 繊細な-大胆な	4.8±1.4	4.8±1.5	5.4±1.5	5.0±1.4	4.2±1.6	4.6±1.4
7. 優しい-厳しい	4.7±1.4	4.6±1.3	5.3±1.2	4.6±1.2	4.2±1.5	5.3±1.5
8. 楽しい-苦しい	3.9±1.2	3.7±1.2	4.7±1.5	4.2±1.1	3.3±1.6	4.0±1.3
9. 鋭い-鈍い	3.1±1.4	2.9±1.3	4.1±1.7	3.1±1.4	1.9±0.9	3.4±1.4
10. 強い-弱い	2.4±1.2	2.4±1.1	2.8±1.3	3.1±1.4	2.7±1.8	3.6±1.6
11. 温かい-冷たい	5.5±1.1	5.0±1.3	5.6±1.2	5.5±1.0	4.7±1.6	5.9±0.9
12. 複雑な-単純な	4.4±1.4	4.6±1.4	5.2±1.6	4.8±1.4	3.9±2.2	3.7±1.4
13. 鮮やかな-あわい	2.7±1.2	2.8±1.0	2.9±1.1	2.9±1.0	2.8±1.4	2.8±1.1
14. 豊かな-貧しい	4.2±1.3	3.7±1.2	4.1±1.3	3.8±0.8	3.8±1.7	4.8±1.4
15. 愉快な-不愉快な	4.2±0.9	4.1±0.9	4.9±1.1	4.5±0.8	3.7±1.6	4.4±1.1
16. 安定した-不安定な	3.6±1.6	3.2±1.3	3.0±1.4	3.4±1.1	2.6±1.4	4.3±1.8
17. 清潔な-汚い	3.6±1.1	3.6±0.9	3.8±1.1	3.7±0.8	2.7±1.7	3.9±0.9
18. 価値ある-無価値な	5.6±1.1	5.4±1.2	5.7±1.0	5.4±1.2	4.7±1.6	5.7±1.7
19. 嬉しい-悲しい	3.8±1.2	3.8±1.0	4.0±1.3	3.7±0.9	3.1±1.5	4.2±1.4
20. 重い-軽い	4.4±1.5	4.1±1.6	4.1±1.8	4.2±1.2	4.7±1.6	4.9±1.4
21. 美しい-みにくい	3.8±1.0	3.8±1.0	4.2±1.1	4.0±0.9	3.4±1.3	4.7±1.0
22. 静かな-賑やかな	5.1±1.4	5.2±1.1	4.4±1.4	5.1±1.2	5.2±1.5	5.4±1.2
23. 大きい-小さい	2.8±1.4	3.1±1.5	2.9±1.4	3.0±1.4	3.1±1.5	4.0±2.0

員(平均値5.5, SD 1.1)が群をぬいた高評点であった。反対に看護婦のもつイメージ(平均値4.5, SD 1.6)は有意(1%)に低く中立点近くの、やや肯定的範囲に位置していた。④「親しみ易い-親しみにくい」(全対象平均値5.1)は、特別養護老人ホーム実習後(平均値5.7, SD 1.1)のイメージが最も肯定的で、最低は講義前後(平均値4.6, SD 1.5・1.3)であり1%の有意差をもって中立点近くの肯定方向にあった。以上の「価値ある」「温かい」「好き」の項目は学生、看護教員に肯定的イメージが強く、回答のバラツキは少なかった。一方、中立点近くにあった看護婦の回答には相当のバラツキがあった。

次に、肯定的でも中立点に近い老人イメージの評点をみせた主なものに、①「繊細な-大胆な」(全対象平均値4.8)イメージがある。この項目の看護婦(平均値4.2, SD 1.6)の評価は低く、学生群のもつイメージ(平均値4.8・4.8・5.4・5.0)との間には1%有意差を認め、また学生群のなかでも特別養護老人ホーム実習後は著しく肯定的イメージをあらわしていた。②「優しい-冷たい」(全対象平均4.7)は特別養護老人ホーム実習後(平均値5.3, SD 1.2)と看護教員が最高点を示し、かつすべての対象に肯定的な「優しい」とイメージされていた。③「重い-軽い」(全対象平均値4.4)では、学生群のもつイメージ(学生平均値4.2)と看護婦群のそれ(看護婦、看護教員平均値4.8)には顕著な違いをあらわしていた。

次に老人イメージの評点が全対象に共通して低かった項目には、①「鋭い-鈍い」(全対象平均値2.7)がある。ここでは看護婦のもつイメージ(平均値1.9, SD 0.9)は特異的に否定的であり、一方特別養護老人ホーム実習後が最も高い得点で中立点(平均値4.1, SD 1.7)にあった。この二者間には1%有意差が証明されている。「鈍い」とする回答も、それぞれの対象に共通して大きなバラツキをあらわしていた。②「強い-弱い」(全対象平均2.7)は最低点の講義前後(平均値2.4, SD 1.4・1.3)と、最高得点の看護教員(平均値3.6, SD 1.6)のもつイメージとの両者は、その他の対象より極端にかけ離れていた。回答のバラツキも、前述の「鋭い」と同傾向であった。③「安定した-不安定な」(全対象平均値3.3)イメージは、看護婦(平均値2.6, SD 1.4)と看護教員(平均値4.3, SD 1.1)では双極をなして、かつ学生群のデータとも有意な違いをみせていた。④「清潔な-汚い」(全対象平均値3.5)イメージは、看護教員(平均値3.9, SD 0.9)が最も高く中立点であった。他の学生群や看護教員より1%有意で否定的イメージが

つよかったのが看護婦(平均値2.7, SD 1.7)である。ここで看護婦の回答には非常に高いバラツキ(変動率63.0%)をあらわしていたが、他の対象では比較的バラツキは少なかった。⑥「鮮やかな-淡い」(全対象平均値2.8)は得点と変動巾は各対象類似していて有意差は全く認められない。老人を「淡い」とイメージすることが多分に強いといえる。

(2) 老人イメージの対象別にみた差異について

①「静的な-動的な」イメージについて、成人看護学実習中間の3年次生(平均値4.9, SD 1.2)と看護教員(平均値3.0, SD 1.7)や看護婦(平均値3.1, SD 1.7)の間には変動率も含めて顕著な違いがあった。即ち、一般に学生達は老人を「静」とし、看護職は「動」としてイメージしていた。そしてまた、学生間でも、イメージの有意差は認められている。②「明るい-暗い」イメージには、特別養護老人ホーム実習後の学生は唯一老人を「明るい」(平均値4.9, SD 1.2)と24.5%の変動率でイメージしていた。看護婦の「暗い」(平均値3.0, SD 1.5, V.C 50.0%)とは大きなズレがある。この二両は各々、他の対象と有意(1%)に異なるイメージをもっていった。例えば、看護婦は学生群や看護教員とも違われ、特別養護老人ホーム実習後の学生は講義前後や3年次生と比べても異なっている。③「鋭い-鈍い」項目は対象間に最も大きな違いを示していた。看護婦は老人を「鈍い」(平均値1.9, SD 0.9)とイメージし、他の対象のそれとは有意に異なった。そして特別養護老人ホーム実習後(平均値4.1, SD 1.7)の得点が最も高く中立点で、これも他の対象より1%有意差をみた。そしてこの項目は回答のバラツキが40%と大きく、各人のイメージには相当なひらきがあったことを示していた。

次に、対象間でのイメージの平均値に差が少なかった項目は、前述の「鮮やか-鮮い」の他に「重い-軽い」「温かい-冷たい」があったが、変動率では項目毎のちがいが見られた。

2) 学外看護実習と老人のイメージについて(図1)

講義後、特別養護老人ホーム実習後、成人看護実習中間の得点で学生のもつ老人イメージの変化を概観してみると、全てにわたって肯定的に回答していた項目に、「親しみ易い」「好き」「繊細な」「優しい」「温かい」「価値ある」などが見出された。どの項目も、最肯定は特別養護老人ホーム実習後のものであり、成人看護実習中間の3年次生のもつイメージは講義後と特別養護老人ホーム実習後のイメージとの中間に取まっている。

次に学外実習後(特別養護老人ホーム実習あるいは成人看護学実習)に評価点の上がった(肯定的イメージ)

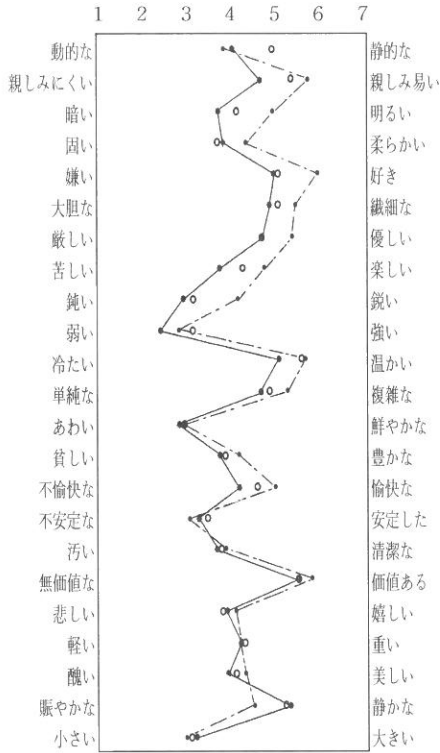


図1. 学習進度からみた年次のプロフィール

● 講義後（第2回目）
 ● 実習（特別養護老人ホーム）後（第3回目）
 ○ 実習（病院）中間（第4回目）

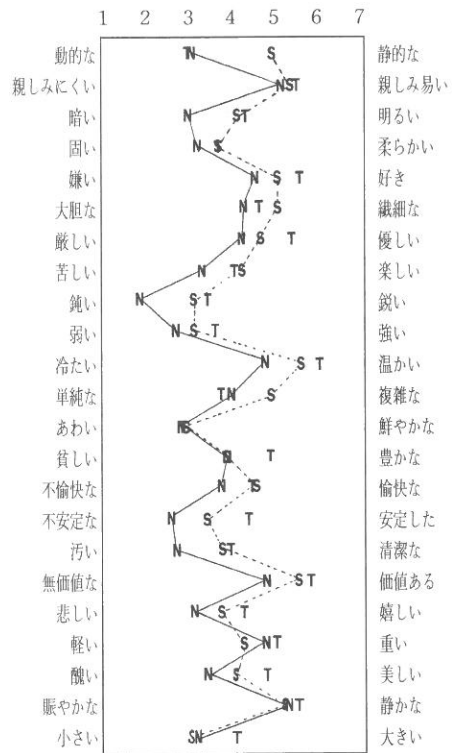


図2. 対象の背景からみた平均的プロフィールの比較

S: 実習（病院）中の学生（3年次生）
 N: 看護婦
 T: 看護教員

項目には、「静的な」「明るい」「楽しい」「愉快な」「鋭い」「美しい」イメージがある。「静的なイメージ」を除けばいずれも特別養護老人ホーム実習後に最も高得点となっている。

一方、否定的イメージを常に示していた「弱い」「淡い」「不安定な」「小さい」イメージのうち「淡い」を除く、「弱い」「不安定な」「小さな」イメージは、特別養護老人ホーム実習後より、3年次生で、僅かながら肯定的イメージの方向に傾いている。いずれにせよ「弱い」「不安定」な否定的イメージが学外実習に於て強められていることは有意に認められた。

3) 3年次生と看護婦、看護教員のもつ老人イメージについて（図2）

成人看護実習中の3年次前期にある看護学生のもつ老人イメージと看護婦のもつイメージとの間で、1%有意差をあらわした項目には以下のものが見出された。

①「静的な—動的な」イメージでは、3年次生は老人を静的と感じ、看護婦には動的であると感じられてい

た。看護婦と看護教員を持つ「動」のイメージは酷似していたが、回答のバラツキは強く50%を越えていて、静、動の種々のレベルでイメージされていたことも物語っている。②「明るい—暗い」では看護婦は老人を「暗い」と感じているが、回答間のバラツキは大であった。看護教員と3年次生は中立位からやや明るい範囲で互いに似たイメージをもっていた。③「好き—嫌い」では看護教員が最も「好き」と感じ、続いて3年次生、看護婦では中立点より「やや好き」のイメージをもっていた。看護婦の回答の巾は35.6%と大きく、種々の感じ方をしている看護婦群ということが出来る。④「繊細な—大胆な」イメージでは3年次生が最も老人は「繊細」と感じ、次いで看護教員がややどちらかという繊細であるとし、看護婦が最も中立点でイメージしていた。⑤「楽しい—苦しい」項目では3年次生と看護教員は中立点にイメージし、看護婦は「苦しい」と感じていた。⑥「鋭い—鈍い」のイメージでは、平均値3.1の「鈍い」と感じている3年次生より、看護婦はつよく否定的イメージとして

「鈍い」と答え、看護教員は3年次生より少し「鈍い」イメージが弱くなっている。いずれの対象の回答にもバラツキは大であった。⑦「複雑な－単純な」について3年次生は、老人を「複雑な」とイメージし、看護婦は回答に変動率（56.0%）がつよくありながら平均すれば「単純な」とする傾向をもっていた。そして看護教員は、回答のバラツキは看護婦より小さく、かつ単純なイメージを最も強くもっていた。⑧「清潔な－汚い」のイメージでは、三者共に得点は低く、汚いと感じているが、看護婦が最も否定的イメージを平均的にはもっていた。（変動率63.0%）。看護教員のデータは3年次のものに似て中立点に近かった。

この他の項目で、看護教員が特異的なデータを示したものに「豊かな－貧しい」と「安定した－不安定な」イメージがある。即ち、看護教員以外の対象は、否定的なイメージで「貧しい」「不安定な」と回答していることが多い中、これを「豊かな」とか「安定した」とイメージしていたことである。

また看護婦と3年次生の間で差異を示さなかったイメージに「親しみ易い」「淡い」「貧しい」「静かな」「小さい」というものがある。

一般に看護婦の回答には巾が大きく、特に「強い－弱い」「清潔な－汚い」「柔らかい－固い」「複雑な－単純な」「静的な－動的な」「安定した－不安定な」「明るい－暗い」「鮮やかな－淡い」などの8項目で50%以上の変動率を示していた。3年次生の回答の変動率の最高は「大きい－小さい」の46.7%、次に「強い－弱い」45.2%があり、最少は「温かい－冷たい」（CV 18.2%）、「愉快な－不愉快な」（CV 17.8%）に見られ、他は20%代のバラツキがほとんどであった。

4. 考 察

1) 全体的な老人イメージの傾向について

老人に対してもつイメージには、特に「価値ある」「温かい」「好き」「親しみ易い」などに評価が高かった。また「繊細な」「優しい」「重い」では肯定的傾向のイメージが見られた。一方、「鈍い」「弱い」「不安定な」「汚い」「淡い」などの否定的イメージをもっていることも明らかにされた。また調査対象別の老人イメージの違いも確かめられた。例えば学生では老人を「静」のイメージでとらえ、看護婦や看護教員は、「動」として感じていて、「静－動」の評価の間で看護婦個々の回答には、巾広いバラツキを見せていたことや、学生にとって老人は決して「重い」イメージや「大きな」存在とはならず、むしろ軽く小さな感じとしてとらえられていると思えること。

しかし看護婦や教員にとっては老人は「重く、決して小さくない存在」になっていること。さらに、特別養護老人ホーム実習終了後の学生のみが唯一、老人を「明るい」とイメージできていたことなどである。大谷らは、看護学生のもつ老人イメージには「温かい」「優しい」「弱い」などがある⁹⁾と報告しているが、筆者らの今回の調査でも、看護学生、看護職共にこれと同様の結果を得た。また、中野は、小学生の高齢者観は全体的に見て肯定的であり、老人に対するイメージに影響を与える因子に「老人との過去の経験がある」とし、経験の多い程、老人の道徳的・倫理的な側面についての評価は肯定的イメージを抱き、更に「老人との過去の経験」と「別居祖父母との現在の交流の有無」が老人の活動性、力量性の評価因子に有意に影響を与えている⁹⁾と指摘している。こうした事柄について言うならば、筆者らの調査結果は、道徳的、倫理的側面を評価する「温かい－冷たい」「優しい－敵しい」の得点は高く肯定的イメージであった。しかし、「清潔な－汚い」「明るい－暗い」「美しい－醜い」の項目では逆に否定的イメージを表わしていた。そして老人の活動性、力量性を示す「強い－弱い」「鋭い－鈍い」「大きい－小さい」「鮮やかな－淡い」というイメージは、児童の中立点に比して、今回の調査結果は著しく否定的なものであった。この調査対象の大部分は核家族化⁶⁾、高学歴化のすすんだ現代社会の風潮を受けて、児童期から青年期に至っている世代⁷⁾の人々であり、高齢者との過去のかかわりや別居している祖父母との交流も疎遠にされがちな生活環境に起因して、否定的なイメージの増強を示してきたものと推察できる。

2) 学外看護実習の老人観に及ぼす影響について

学外実習に、焦点を当てて、学生のもつ老人イメージの変化を見たとき、特に1年次後期に実施した特別養護老人ホーム実習終了時の評点は、顕著な肯定的上昇を示した。例えば「親しみ易い」「好き」「繊細な」「優しい」「温かい」「複雑な」「価値ある」というイメージは更に強化されていた。そして続く、3年次生の成人看護学実習中間でのイメージは、1年次後期の老人看護概論の講義のみのときのデータと、特別養護老人ホーム実習後のデータの中間に取まっている。中には特別養護老人ホーム実習後の否定的なイメージのものが、3年次には幾分プラス方向に変化したものも見受けられている。例えば「強い－弱い」「安定した－不安定な」「大きい－小さい」などがそれである。この理由には、健康障害を持った患者に出会い、看護していくなかで、老人の強さとか、社会生活を続けている人の存在感と安定性を感じることができるようになっていったことが推察できる。また3

年次生は老人を「固い」「悲しい」とするイメージをよく持っていた。これは治療のために老人の個人生活の犠牲を強いられた姿から受けたイメージと、老化現象を実感した結果によるものと推察される。

池田らの「介護体験やボケ老人との接触、いわゆる健康障害といえる老人との……特殊な経験は否定的イメージに強く影響する」⁹⁾とか、谷田の「実習で接する老人がねたきりや障害、病気をもった人のときには否定的イメージでとらえる」⁹⁾という指摘には筆者は、いささか疑問をもつものである。なぜならば仙田らも「とかく知らないで老人を敬遠していた学生達も『寝たきり老人とも会話をもちたい』という積極的な姿勢が見えはじめた」¹⁰⁾と特別養護老人ホームにおける寝たきり老人や痴呆老人の看護(介護)実習における学生のあたたかい接近姿勢を高く評価しているように、今回の調査結果でも、老人に対する肯定的イメージは急上昇した。筆者の経験からも、特別養護老人ホーム実習の5日間で、「最初2日間ほどは本当に戸惑い、苦しみ……3日目頃から、わずかであるが老人と心が通い始めたことを実感し、終了日の5日目には涙で老人と別れる経験をする」¹⁰⁾のである。老人のイメージは老人の障害レベルによって規定されるのではなく、むしろいかなる障害をもった老人を受けもったとしても、その老人と共有する体験の内容が重要¹²⁾であったことを証明したのが今回の特別養護老人ホーム実習後の肯定的イメージの評点といえよう。

老人看護学が教科として確立されても、実際に老人に相対する看護実習の期間が極端に短かかったりすると、老人の特徴をおさえる認知領域に時間と関心を奪われてしまい、老人との間に共有する体験を持ってぬまま実習場を通り過ぎる結果となったり、また実習に伴う準備とまとめを省くと、学生達は自分の体験を確認したり評価しあったりできず、課題を明確にできないままの中途半端な経験に終わってしまう。学生は今までに経験したことのない健康障害や機能障害をもった老人と出会い、恐れと不安を短時日の実習からもち、拒否感や嫌悪感さえ感じるようにならないだろうか。こうした実習下では学生は肯定的イメージを持つことはむづかしくなる。

本学の実習で「老人の生き方に感動し、自分の生き方をふり返る」「老人に思わず声をかけてみたくなった」「自分の祖父母に面会に行こう、そして一度じっくり話をきいてみよう」等等、今までのもっていた学生の老人観が180度変わったとするレポートや発言は数えられないほど毎年生まれている。学生達に、広く深い老人観が育つように、あらゆる状況や健康レベルの老人と出会い、老人との間に、人間関係が生れるような教育内容を準備

したいものである。

大淵らが「老人の可能性に最大限にアプローチを展開する姿勢を見る、このようななかでの実習に出て…病気をもっていても否定的なイメージをもたず、老人ケアの考え方が積極的になっていく」¹³⁾と報告していることを参考にすると、特別養護老人ホームはまさにこの大淵のいうレベルの施設である。そして、3年次生で老人イメージがマイナス方向に変化していた原因に、現在の治療最優先の臨床、老人の個人的生活を犠牲にした上に成り立っている治療現場で、老人自身は意欲をそがれ、体力は低下し、活気や喜びを失っているために、弱く、もろく、小さく、軽い存在が老人そのものであるような印象を与えていると考えられないか。これからは老人看護、看護の基本をしっかりとおさえている実習現場を用意して、健全な老人観を育てるという努力も欠かせないことが重要となる。

3) 看護学生と看護職のもつ老人観のちがいについて

老人専門病院に勤務する看護婦は老人に対して、どの対象よりも有意に否定的イメージをもっていたことが証明された。特に「鈍い」をはじめとして、「暗い」「苦しい」「弱い」「不安定な」「汚い」「悲しい」「醜い」「小さい」という老人観である。また、肯定的なイメージの項目の場合でも、平均値では中立点に最も近く、学生の評価より大巾に低い。「肯定的なイメージは体験の有無に、否定的なイメージは体験の質が影響する」¹⁴⁾という論理に立てば、老人専門病院では、まさに人材、人手不足の状態であり、しかも、ねたきりに近い多勢の患者を看護していくとき、必要最低限の看護処置に日夜追われ、患者も我慢を余儀なくされ遠慮がちになってしまう。このような看護体験の質の稚さや看護婦のもつジレンマが老人に対するイメージをより否定的なものとし、回答にバラツキを生じさせたと考えられる。そして肯定的イメージの中の「好き」「優しい」「温かい」「繊細な」「複雑な」「価値ある」とする得点も、学生のものより低い。これらは看護婦と老人との関係の質、内容に於て、個人的、人間的なかわりが他部署に比して得られていないことを示しているといえる。同じ看護職でも看護教員は看護教育という仕事柄、看護体験の質の向上の努力を常日頃から意識して患者と対峙している。こうした日常業務の違いが、二者の老人イメージを両極端に分けたと考える。大谷らのいう「生活経験がイメージに影響を与えるのではなく、どの程度老人と接しているか、その内容が重要」¹⁵⁾であることは、二者の看護職のもつイメージ「好き」「温かい」「繊細な」「価値ある」「清潔な」「鋭い」などの有意差として証明されていた。

5. ま と め

本稿は学外看護実習と老人のイメージとの関係に焦点をあてて追跡調査した。また看護職のもつ老人のイメージも分析・検討していった。

その結果以下のことが明らかにされた。

1) 老人に対するイメージは看護教員に最も肯定的なものが多く、老人専門病院の看護婦には否定的イメージがよかった。

2) 学外実習のうち、特別養護老人ホーム実習直後の老人イメージが有意に肯定的であった。これは老人と真剣に一定期間をかけてかかわったことと、実習施設の老人の自主自立への積極的な働きかけに影響をうけた結果と考えられる。

3) 調査対象に共通してみられた肯定的イメージには「親しみ易い」「温かい」があった。

また体験の量の有無に影響されるという「親しみ易い」「好き」「優しい」「繊細な」「温かい」「価値ある」というイメージは、特に学外看護実習後の学生と看護教員に特に高く認められていた。

4) 体験の質・内容に影響されるという、否定的イメージは、全体的に「弱い」「貧しい」「鈍い」「小さい」という項目に多く見られた。特に老人専門病院に勤務する看護職は多くの項目で他の対象より否定的イメージを有意に強くもっていることが分かった。

一方看護教育にあたる教員を、老人専門病院の看護婦と比べた時「重い」「小さい」の共通するイメージを除くと、他の項目では、著しい老人イメージの違いを呈した。

今回の研究で、老人観を育てるためには、老人とかかわるといふ経験の量と共に、生活経験を含む体験内容およびその質の充実が重要なこと。老人にQOLを求めた働きかけを職員がいかにしているかは、老人看護の教育環境としても大切であることが判明した。この研究で得た知見を生かして、今後の教育計画内容のくみ立てを行って行きたいと願うものである。

また引き続き、看護関連職、一般市民や老人自身のもつイメージについても調査して行きたいと願っている。

最後に、この調査に快く御協力下さいました学生と看護職員の皆様にお礼申し上げます。

引 用 文 献

- 1) 大淵律子, 鎌田ケイ子他: 看護基礎教育終了時の老人に対するイメージ, 一老人看護教授の有無による比較一, 第22回看護学会集録一看護教育一, 87, (1991)
- 2) 片山信子, 出宮一徳: 老人看護学教育の検討一看護学生のもつ老人イメージと教育のかかわり一, 岡山県立短期大学研究紀要, 第33巻22号, 172 (1990)
- 3) 大谷英子, 松木光子: 看護学生の老人イメージと老人ケアに対する姿勢の変化, 第22回看護学会集録一看護教育一, 85 (1991)
- 4) 3)に前掲 84
- 5) 中野いく子: 児童の高齢者観, 月刊福祉, 74 (6) 93~94 (1991)
- 6) 三浦文夫編, 図説, 高齢者白書 1988, 30~31, 全国社会福祉協議会, (1988)
- 7) 2)に前掲 168
- 8) 池田敏子, 伊東久恵他: 老人に対するイメージとその形成に影響する因子(第二報)一医療系学生の入学時現状分析一第22回, 看護学会集録一看護教育一92, (1991)
- 9) 谷田恵美子: 看護基礎教育課程(3年課程)でアンケート調査を実施して, 学生がもつ老人のイメージをさぐる, 平成2年度, 看護教育学会集録 35 (1990)
- 10) 仙田洋子, 片山信子: 特別養護老人ホームにおける成人看護学, 内科系看護実習Iの試み, 看護, 33 (12) 64 (1981)
- 11) 片山信子: 実習を通しての老人理解, ナース・データ, 10(12)57~58 (1989)
- 12) 4)に前掲 85
- 13) 1)に前掲 89
- 14) 8)に前掲 92
- 15) 12)に前掲 85

平成3年10月30日受付

平成3年11月7日受理